

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第5回 島根県がん対策推進条例制定の効果

2006年2月、がんサロン開設後、すぐに県がん対策推進部部長に24項目にわたる要望書を提出した。後で思ったことだが、24項目とは多すぎる。これまで書きためてきたcheck資料をそのまま出してしまったからだ。なぜ絞り込まなかったの

全国のメディアで露出、話題の的に

医療

だろう。迂闊だった。2006年6月、回答書を書面で受け取った。これは珍しい。行政が回答の書面を作るとは。その中に「がん対策推進条例」は考えていないと返事があった。つまり「N O」。それを山雲県域の県議会議員・佐々木雄三先生が受けていただいた。2006年9月、「議員提案」でがん対策推進条例は可決成立した。全国初のこと。たった3ヵ月後、事態は一変した。メディアは大々的に取り上げた。全国の注目の的となった。視察がひっきりなしにあった。その年の「がん政策サミット」で佐々木雄三議員が、条例が出来る過程を全国都道府県の皆さんに説明した。この効果は絶大だった。各県がその条例作りに走り出した。現在は「がん対策推進条例」は31道府県で制定されている。集まると話題は常に条例のこと。条例制定がその県のがん対策を推進する。そこまで加熱していた。「がん対策推進条例」が出来た。次は「がん対策推進計画」があり、その中に「数値目標」が書き込まれる。ここまでは行政もできるがそこからが下手だ。目標数値を安易にする傾向がある。成果配分、信賞必罰がないからだろう。民間企業にいた人間なら、数値目標の凄さ、怖さは身にしみている。そのような気持ちにならないければ、目標数値は達成できないと思う。にも関わらず行政は数値を追っかける術を知らない。そして毎年同じことの繰り返しで足踏み状態を繰り返すのが常だ。昨年の「がん政策サミット」で数値目標の追っかけ方を説明する機会を得た。5年計画を1年に割り、1年を四半期に割る。するとそこに責任が発生する。人事異動で部署を離れても、その期間の達成度は図れる。それが民間企業のやり方だ。行政マンよ。もっと世間を知ろう。



患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第6回 県との二つの約束ごと

1) がんサロンの合同意見交換会 年4回以上
2) 県下がん診療連携拠点病院長との意見交換会 年1回

このような約束事が雑談からまとまっていった。がん対策推進条例が2006年9月、議員提案で制定された。全国初、メデイ

リーダーの集い、島根から全国へ

アは大々的に取り上げてくれた。その後、がん対策推進計画作りと数値目標設定の会合があった際、私が作成していた計画値を提出した。高いハードルで、期限付きのものだった。企業マンとしては当然のことだったから。

その提出した数値がその後、県の計画値となった。期限付きだったが、その期限が延長された。

いろいろな会話の中から上記の2つが決まっていた。これは行政の英断だった。

わたしたちのがんサロンは当時、県下に10カ所以上で出来ていて足並みをそろえる必要があった。そのためには時々集まりたかった。がんサロンの意見統一と情報収集が必要と感じた。

最初は松江市で開催されたが、以降、島根県の中央に近いところで開催されるようになり、また分科会的に地域別の開催もするようになった。交通費は全額公費で賄われ、出席率も100%に近かった。がんサロンのリーダーの集まりは、やがて全国へも知れ渡り、島根モデルがその原型をなすようになった。現在も継続して開催されている。約束通り。

がん診療連携病院長との意見交換会は年1回とはいえ患者が面と向かって意見を言える場として、患者と医療側との壁は低くなっていった。

島根県の第1回がん対策推進協議会の会長が、がん診療連携拠点病院長だったことも幸いして院長との意見交換会は実現した。確かに最初は対立関係からスタートした。

「患者が生意気言っただけ」そんな雰囲気が見て取れた。

その後、医療連携ネットワーク会議と連動することにより、さらに他の病院長との連携も出来てきた。同じ場所で連続して時間差を設けて開催することが、このようなことを可能にした。

その後、事前に提出した質問を医療側が分担して回答するまでに進化した。この2つの意見交換会が評価されたことは言うまでもないことだった。

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第7回 島根県がん対策推進協議会委員と地域支援病院患者委員になって

島根県がん対策推進協議会患者委員に選任され2期4年を担当した。当初、患者委員は4名選出された。最初の頃は患者委員が主導権を持っていた。島根大学のある研究室で、協議会委員たちの年間発言数を委員長、行政側、医療側、患者別にデータ化したことがあ

患者が意見 最初は“けんか腰”

医療

った。発言数は患者委員が断トツに多かった。患者の発言数が圧倒的に多かったのは、それだけ問題点や課題が多かったからと言える。また小部会を3部会作り、そのメンバーに当時の国のがん対策推進協議会委員を2名入れたことは国の情報が身近で聞いた点でラッキーだった。最初は「けんか腰」のところもあったようだ。でも患者にとっては真剣勝負の場だった。ここで行政側も患者を無視する訳には行かなくなってきたようだ。私が委員を終えてからは患者の発言数が大幅に減少したのは頂けない。患者も勉強しないと公式の場ではなかなか発言しにくいものだ。「患者が変われば医療が変わる」このようなスタンスを持つべきだろう。益田赤十字病院内でがんサロンの開催していたある日、病院から「地域支援病院の患者代表委員」になってほしいと依頼があった。これはありがたい。地域の医療に関して発言の場が出来たからだ。参加者は院長、副院長ほか事務方スタッフの方々10名ほど。その他、圏域の医師会長、歯科医師会長、薬剤師会長、保健所長、市保険関連部長、消防長、有識者3名、患者代表とそうそうたるメンバーで、益田圏域の医療に携わるメンバーが勢ぞろいしているのは有難かった。私は毎回ながしかの資料を提出しながら、何かを伝えていく。訴えている。全国クラスの学会に参加したこと、各種研究会に参加したことを、学会、研究会に参加したのは島根県から医療者の参加が極端に少ない。忙しいのはわかるが他県の医療者はたくさん参加している。もっと世界の情報を身につけなければとどんな格差がついてしまう。地方の医療者ほど新しい情報を学んでほしい。また学ぶべきだろう。都会と同じスピードではいつまでたっても都会には追いつけない。医療に限らず全てのことに言えることだ。地域の終末期医療を推進したかった私にとって、このような場は嬉しい。情報を入手する場、情報を発信する場として、この最高のステータスをどう生かすかが問題だろう。

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、Iターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第8回 ジャーナリスト 鳥越俊太郎氏と対談して思うこと

ある日突然、中央公論社から電話が来た。鳥越俊太郎氏との対談の依頼だった。正直驚いた。著名な方と対談するなんて思いもしないことだった。誰が私の名前を教えたのだろうか。まったく見当もつかない。でも田舎の島根県益田市で全国初の「がんサロン」

医療の地域格差 訴える

医療

をスタートさせ、全国展開をするまでに至ったことを誰かが評価して頂いたのであるか。神様も粋な計らいをするものだ。こんなチャンスは滅多にあるものではない。とにかくお受けすることにした。後先考えなくても仕方がない。

2010年1月8日11時〜12時30分、ANAインターコンチネンタルホテル東京で開催することになった。数度電話やメールで場所や内容など打合せを行っただけ。あとはぶっつけ本番を迎えるだけ…。

前日に東京に移動した。何度となく行っている東京。でも六本木界隈は初めてだった。東京ではほとんどがビジネスホテル泊り。今回事配頂いたのは高層階の17F。部屋も広い。何となく落ち着かない。

当日朝6時に目が覚めた。お天気は良い。ちょっと散歩でも見ようか。坂が多い。上りあり、下りあり。相当しんどい。この付近には各国の大使館・領事館が立ち並ぶ場所。

10時45分、鳥越氏が現れた。朝日放送で生番組を終えられての参加だった。幸いその番組をホテルの部屋で観ていた。ラッキーだったと言っかない。というのは司会者が入ると思っていたのが鳥越氏と私だけ。部屋に2人が残された。

さあどうする。前に医療ライターがいて、録音テープが回り始めた。直前までTVを見ていたことが幸いした。話題はそこから入った。スムーズな導入だった。

「地域格差」「患者力」「前向きは『最良の薬』」「がん患者の団結」「国の向かう先は」。

こんな流れで90分が終わった。楽しくも緊張した時間だった。一つ驚いたことがあった。鳥越氏自身が受けている治療は全国どこでもだれでも受けられると思っただけで居られたことだった。これにはびっくり。

全国を講演して回られる鳥越氏にお願いした。

「あなたの受けられている治療は並みの治療ではない。誰でも受けられるわけではない。それだけ地域格差があるのだ。医療の地域格差は大変大きいことを知ってほしい。そのことを全国の皆さんに伝えてほしい。これが私からのお願いだった。」

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(カイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第9回 がん政策サミットへの参加とその効果 その①

2009年からスタートも市民医療協議会が負担した「がん政策サミット」。医療政策機構 市民医療協議会がリードし、1泊2日の研修の交通費、宿泊費とがん患者の私たちがとったらしい。

患者目線の”がん対策”、島根県が全国初

ては本当に有難かった。最初は全国10県ほどから患者リーダーが集まり、情報交換の場ではなかった。それぞれの会の活動状況報告、今後、会をどう進めたいか、これからの目標などを報告した。アンケートを作り「目指す先」をはっきりとするのが狙いだ。目指すは国にがん患者目線の「がん対策」をいかに伝えるかが目的だった。午後は衆参両議員会館回りも行った。

自県の国会議員の事務所に行くと思いきや、私を含めて「がん対策」に熱心な議員のところを重点に訪問した。自県へは何う意味がなかったのだ。抜き打ち訪問であったが議員が不在のときは秘書と話しが出来た。突然の訪問にも秘書の

対応は丁寧だった。この人脈をいかに使うかが、カギとなるだろう。そんな印象だった。

2006年9月、島根県が全国初の「がん対策推進条例」を作った。これは大きな話題となってその情報は全国を駆け回った。2009年秋の「がん政策サミット」でその条例は披露され、「島根モデル」(7位1体)として知れ渡った。

がん政策サミットでの報告者は、島根県県議会議員の佐々木雄三先生だった。当然、県職員も同行した。これが県議会議員、県行政が参加するきっかけとなった。つまり「3位1体」のスタートとなった。

年2回(春、秋)開催だったが、同じことが2年ほど続いた。2011年、「3位1体」から「4位1体」(医療現場が追加)に膨れ上がった。4者が集まるということは、自県で「患者が求めるがん対策」が決められていくことに繋がる。

参加者は毎年どんどん増えた。2012年には35都道府県250名にまで膨れ上がった。患者リーダー約80名、県行政約60名、県議会議員約70名、医療者約40名、研究者約10名、メディア約20名の大所帯となった。

この年から超党派の国会議員連盟「がん家族・遺族の会」の総会が同会場で行われ、多職種の方が入り乱れることになった。もちろん厚生労働省担当セクションからも役人が参加。1石数鳥の効果が生まれることになった。

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(カイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第10回 がん政策サミットへの参加とその効果 その②

がん政策サミットは、2013年秋には東京から離れて奈良でも開催された。このときは奈良の県会議員10数名が参加。関心の高さ

「島根モデル」の「7位1体」は、患者、行政、医療現場、県議会、メディア、産業界、教育の7項目から

が窺えた。

“11位1体”の活動、がんサロンで披露

なっている。私自身は「11位1体」を表現している。建築学、宗教学、人生学、終末期医療の4項目を追加しての活動だ。

2014年には全国各県の「がん対策推進条例」を10項目に分けて担当者を決めて、全国各県の「がん対策推進計画」を比較検討し、グループ別に分け、成果を発表した。私は緩和ケアの推進の項目を受け持った。「全国47都道府県の緩和ケアの推進」の項目をすべてチェックして、評価した。この項目では広島県、滋賀県が優秀で、目に見える計画が示されていた。全国各都道府県の計画をこんなにしっかりと調べたのは今回が初めて。良き勉強が出来た。

2014年には全国各県の「がん対策推進条例」を10項目に分けて担当者を決めて、全国各県の「がん対策推進計画」を比較検討し、グループ別に分け、成果を発表した。私は緩和ケアの推進の項目を受け持った。「全国47都道府県の緩和ケアの推進」の項目をすべてチェックして、評価した。この項目では広島県、滋賀県が優秀で、目に見える計画が示されていた。全国各都道府県の計画をこんなにしっかりと調べたのは今回が初めて。良き勉強が出来た。

そこで気がついた。それは

はがん対策推進計画は2期目となり、2013年から5年計画がスタートした。厚生労働省の指示によるものだった。各県とも計画、計画値、目標値は確かにある。ではその数値目標は誰が責任を持つのだろうか。5年を通して同じ部署に配属している県職員はいないだろう。目標に達せねば責任はどうなるのだろうか。

企業にいたものからすれば信じられないことだ。信賞必罰がない。これではだめだ。そこで全員の前の発表の時、以下の項目を追加した。

5年計画値→1年計画に分割→1年計画を4半期計画に分割する。

そうすれば在籍中に責任が発生して来る。これはグッドアイデアと我ながら思った。反応は鈍い。数値を追っかけることに慣れていないのだろうか。数値に関心がないのだろうか。

「11位1体」の活動は2015年2月21日～22日、島根県益田市で開催する「がんサロン支援塾」開催でみなさんにお知らせしている。4年連続開催で助成金が続けば、あと数年実施したい。需要はまだある。しかし体力的にきつくなってきたのも事実だ。あと何年出来るかは疑問だ。「11位1体」の連携はがんに限ったことではない。どの業界でもだれでも出来る「しくみ」「仕掛け」なんです。みなさんも大いに参考にして企業の活性化に応用してはいかがでしょうか。